『日本浪曼派』と『四季』 1930年代における文学の一面

<table>
<thead>
<tr>
<th>著者</th>
<th>河野 仁昭</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>雑誌名</td>
<td>キリスト教社会問題研究</td>
</tr>
<tr>
<td>号</td>
<td>☞</td>
</tr>
<tr>
<td>ページ</td>
<td>☞</td>
</tr>
<tr>
<td>発行年</td>
<td>1974年3月</td>
</tr>
<tr>
<td>権利</td>
<td>同志社大学人文科学研究所キリスト教社会問題研究会</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000008300">http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000008300</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>
『日本浪漫派』と『四季』

河野 仁 昭

九〇年代は、われわれの想像力に対して、刺激的で複雑に訴えかけてくる時代である。歴史全体がそうであ
り、文学の領域に限ってみると、やはりそうである。暗黒の時代であったことはたしかだが、なんら実をもたら
さなかったわけでもない。

五年戦争の勃発になった九十一（昭和廿六年）年九月の柳条橋事件以降の数年間に限定してみても、国家権力の
容赦ない弾圧のもとで、圧殺され、解体される傾向はなくされ、屈折し消滅するプロレタリア文学の受難は、まずわれ
れの関心をとらえる。そして、革命の芸術に対する芸術の革命を目指したモダニズム文学の登場。脱政治、脱思想的文学と、伝統的なるものの、あるいは日本的なもの、ひいては自然への回帰などが、その時代の文学の特徴的傾向としてつつよくわれわれの関心をそ
そる。
時代が生んだ文学雑誌であり集団であった。もっとも、非常に集団と言ってはいかがするであろうか。その実態は徐々に明らかになか八に見た「日本浪漫派」の問題が、文学史あるいは思想史の対象として、再検討され評価されるようになっ
たのは、そんなに遠い過去のことではない。三枝茂高、橋川文三、江藤淳、大岡信、大久保典夫ら「日本浪漫派」の
人々がいりないし二世代まとの学者や批評家、それを、あらためて多面的に掘り出しその一つである。
戦後まもない時期に、同時代の評論家であり「コギト」の一部の同人と若千かかわりあいがあった竹内好は、「マ
ルス主義者を含めての近代主義者たち、血なれた民族主義をよけて通った、自分を被害者と規定し、ナショ
ナルズのウルトラ化を自分の責任外の出来事とした。」「日本ロマン派」を倒したのは、かれらではなくて外の力なものである。外の力によって倒されたものを、自分を過信したことはなかっただろうか」と言ったが、倒されたと見た「日本浪漫派」が、こんにちはかも華やかに復活したのは、それが「外の力」によって倒されたことによるのか、現在の若い読者
年代に酷似する面を多分にもっていると思うべきなのか。
個々の文学的成果の点でも、長谷川川も指摘したように、保田や亀井の評論、大宰と伊藤佐喜雄の小説などを除くと、特筆すべきものはないように思う。

つまり『日本浪漫派』といえども、深海の怪魚のようなくわしい雑誌あるの集団という先入観が、正直のところわたしたしではなかった。だから雑誌の復刻版を手にしたとき、一種拍子抜けの感をおぼえたのである。復刻版の別冊『日本浪漫派とはなにか』（雑誌『雑報』）で、同人たちは意図同音に、決して世の非難を浴びねばならぬような時局便乗的な雑誌ではないということをわたしでも承知しているが、それでも肝に臓処である。時期の同人雑誌と、それを支えていた集団の呼称では、なかなかにしもしろく、たしかに、ジャーナルコンセプトにもあまりのらかなかったらしい一時期の同人雑誌と、それの存在が大変気になった。何をしようという具体的な計画はなかったが、この呼称のうちにもかしこら共通の感情のあるのを感じて、やがてその感情をはっきりと現しつつある。けれども、この名称が大変気にに入った何をしようという具体的な計画はなかったが、この名称のうちにもかしこら共通の感情のあるのを感じて、やがてその感情をはっきりと現しつつある。
『日本浪漫派』と『四季』（河野）

そうく念頭にあったのだろう。とにかく、まず誌名がきまり、その誌名にふさわしい内容の雑誌にしようとしたら難しいことは、もうかかったもので雑誌の名前が決まる。それらが逆に同人の意識に作用し、一つの運動として出発した。しかも、そのような出発したものが、そのこと自体は異とされるに足らぬとも言えよう。たとえ彼らが、高踏的に行いな広告を掲げて出発したグループであろうと。

「日本浪漫派」は、同人その他の合流するのです。同人のすべてが実作でも「日本浪漫派」の理念や目標に即したものを発表するとは困難であったろうことを意味するはずであり、実際にはなかなかそろうなかったのです。それゆえ、雑誌の刊行を継続する過程では早くも「青い花」の同人その他の合流するのです。

「日本浪漫派」即「コギト」ではなかったが、もしそうなら並行して新しく「日本浪漫派」を始める意味もなかっ

たから、保田田に対して雑誌とグループの理念や方向性については、探りつつ歩むという状態にあったのではない。文学的日本主義の追求でもない。おそらく、彼らが学生時代に深く影響された唯物史観や
社会主義リアリズムの超克あるいは離脱の方策を発見し確定することであった。神保光太郎は創刊号の「日本浪漫派」の「われわれから直前の時代はこの憂を傷だらけになって抑制するところに詩があった。今」「社会主義リアリズムの超克あるいは離脱の方策を発見し確定することであった。神保光太郎は創刊号の「日本浪漫派」の名

にかけては、この抑圧を奔流へ到達すべきことを決意すると言っている。抑圧とは、かならずしも国家権力の圧力の意味ではなく、階級の解放を第一義としてきた詩人たちは、自己の内面衝動や欲求の詩的表現を犠牲にせざる

をえなかったと解釈すべきことである。血みどろの転向体験者であった亀井勝一郎の場合には、さらにによる積極的であり

全存在なものだったので、挫折者あるいは敗北者としての自我を、文学に賜けることで救いあげ、生きなおそう

とする痛烈な願いがあったと察せられる。しかしこれ、神保の徴服的ともみえる設定示し、かならずしも亀井の志向と

質ではない。挫折や痛みの程度や様相の差ほどにはべったりはないと、言ってよいだろう。問題は本来的な自我の発

見か、今日現実的な課題として、自我の再建の必要性に迫られていただけである。なにを抗じ所に再建すべきなのか。

右のようないかに関するかぎり、保田与重郎にしても大阪高等学校時代には戦闘的な短歌を書いていたが、階級運動に

向の事実であり、長篇小説「花宮」をかいた伊藤佐喜雄は熟心の活動家だった。創刊後には加わった太宰治が転向者であったことは

がなかったのにみえる伊東静雄にとっても、大阪の住吉中学の教諭になった昭和四年の二月、友人にいた手

紙のなかで、インテリジェンチュの悩みは唯物史観のものに矛盾を発見することによっておこるのでなく、革命

理論である唯物史観を「革命的熱情を持てぬ我々には頭でだけ肯定される。そして温熱的な革命理論が、熱情なし

にかけては、この抑圧を奔流へ到達すべきことを決意すると言っている。抑圧とは、かならずしも国家権力の圧力

の意味ではなく、階級の解放を第一義としてきた詩人たちは、自己の内面衝動や欲求の詩的表現を犠牲にせざる

をえなかったと解釈すべきことである。血みどろの転向体験者であった亀井勝一郎の場合には、さらにによる積極的

であり、全存在なものだったので、挫折者あるいは敗北者としての自我を、文学に賜けることで救いあげ、生きなおそう

とする痛烈な願いがあったと察せられる。しかしこれ、神保の徴服的ともみえる設定示し、かならずしも亀井の志向

とは異質ではない。挫折や痛みの程度や様相の差ほどにはべったりはないと、言ってよいだろう。問題は本来的な自我の

非、今日現実的な課題として、自我の再建の必要性に迫られていただけである。なにを抗じ所に再建すべきなのか。

右のようないかに関するかぎり、保田与重郎にしても大阪高等学校時代には戦闘的な短歌を書いていたが、階級運動に

向の事実であり、長篇小説「花宮」をかいた伊藤佐喜雄は熟心の活動家だった。創刊後には加わった太宰治が転向者

であったことは、がなかったのにみえる伊東静雄にとっても、大阪の住吉中学の教諭になった昭和四年の二月、友人

にいた手紙のなかで、インテリジェンチュの悩みは唯物史観のものに矛盾を発見することによっておこるので

なく、革命理論である唯物史観を「革命的熱情を持てぬ我々には頭でだけ肯定される。そして温熱的な革命理論が、熱情な

しにかけては、この抑圧を奔流へ到達すべきことを決意すると言っている。抑圧とは、かならずしも国家権力の圧力

の意味ではなく、階級の解放を第一義としてきた詩人たちは、自己の内面衝動や欲求の詩的表現を犠牲にせざる

をえなかったと解釈すべきことである。血みどろの転向体験者であった亀井勝一郎の場合には、さらにによる積極的

であり、全存在なものだったので、挫折者あるいは敗北者としての自我を、文学に賜けることで救いあげ、生きなおそう

とする痛烈な願いがあったと察せられる。しかしこれ、神保の徴服的ともみえる設定示し、かならずしも亀井の志向

とは異質ではない。挫折や痛みの程度や様相の差ほどにはべったりはないと、言ってよいだろう。問題は本来的な自我の

非、今日現実的な課題として、自我の再建の必要性に迫られていただけである。なにを抗じ所に再建すべきなのか。

右のようないかに関するかぎり、保田与重郎にしても大阪高等学校時代には戦闘的な短歌を書いていたが、階級運動に

向の事実であり、長篇小説「花宮」をかいた伊藤佐喜雄は熟心の活動家だった。創刊後には加わった太宰治が転向者

であったことは、がなかったのにみえる伊東静雄にとっても、大阪の住吉中学の教諭になった昭和四年の二月、友人

にいた手紙のなかで、インテリジェンチュの悩みは唯物史観のものに矛盾を発見することによっておこるのでなく、革命

理論である唯物史観を「革命的熱情を持てぬ我々には頭でだけ肯定される。そして温熱的な革命理論が、熱情な

しにかけては、この抑圧を奔流へ到達すべきことを決意すると言っている。抑圧とは、かならずしも国家権力の圧力

の意味ではなく、階級の解放を第一義としてきた詩人たちは、自己の内面衝動や欲求の詩的表現を犠牲にせざる

をえなかったと解釈すべきことである。血みどろの転向体験者であった亀井勝一郎の場合には、さらにによる積極的

であり、全存在したものだったので、挫折者あるいは敗北者としての自我を、文学に賜けることで救いあげ、生きなおそう

とする痛烈な願いがあったと察せられる。しかしこれ、神保の徴服的ともみえる設定示し、かならずしも亀井の志向

とは異質ではない。挫折や痛みの程度や様相の差ほどにはべったりはないと、言ってよいだろう。問題は本来的な自我の

非、今日現実的な課題として、自我の再建の必要性に迫られていただけである。なにを抗じ所に再建すべきなのか。

右のようないかに関するかぎり、保田与重郎にしても大阪高等学校時代には戦闘的な短歌を書いていたが、階級運動に

向の事実であり、長篇小説「花宮」をかいた伊藤佐喜雄は熟心の活動家だった。創刊後には加わった太宰治が転向者

であったことは、がなかったのにみえる伊東静雄にとっても、大阪の住吉中学の教諭になった昭和四年の二月、友人

にいた手紙のなかで、インテリジェンチュの悩みは唯物史観のものに矛盾を発見することによっておこるのでなく、革命

理論である唯物史観を「革命的熱情を持てぬ我々には頭でだけ肯定される。そして温熱的な革命理論が、熱情な

しにかけては、この抑圧を奔流へ到達すべきことを決意すると言っている。抑圧とは、かならずしも国家権力の圧力

の意味ではなく、階級の解放を第一義としてきた詩人たちは、自己の内面衝動や欲求の詩的表現を犠牲にせざる

をえなかったと解釈すべきことである。血みどろの転向体験者であった亀井勝一郎の場合には、さらにによる積極的

であり、全存在なものだったので、挫折者あるいは敗北者としての自我を、文学に賜けることで救いあげ、生きなおそう

とする痛烈な願いがあったと察せられる。しかしこれ、神保の徴服的ともみえる設定示し、かならずしも亀井の志向

とは異質ではない。挫折や痛みの程度や様相の差ほどにはべったりはないと、言ってよいだろう。問題は本来的な自我の

非、今日現実的な課題として、自我の再建の必要性に迫られていただけである。なにを抗じ所に再建すべきなのか。

右のようないかに関するかぎり、保田与重郎にしても大阪高等学校時代には戦闘的な短歌を書いていたが、階級運動に

向の事実であり、長篇小説「花宮」をかいた伊藤佐喜雄は熟心の活動家だった。創刊後には加わった太宰治が転向者

であったことは、がなかったのにみえる伊東静雄にとっても、大阪の住吉中学の教諭になった昭和四年の二月、友人

にいた手紙のなかで、インテリジェンチュの悩みは唯物史観のものに矛盾を発見することによっておこるのでなく、革
『日本浪漫派』と『四季』（河野）

に理解される時、それが虚無的色彩を、然も破かれられたあとも茫然とたちまくで、過ぎゆく白雲をなめる様
な虚無」を感じさせるのではないかと言っている。そうした精神的的論的の位置に身をおいていたのである。

おそらく右のような事実は、さもなくとも『日本浪漫派』に固有のことは少なく、昭和初年あるいは一九二〇年後の
若い知識人たちに、大なり小なり共通に認められる点であり、知的状況であったろう。だから、『日本浪漫
派』の特質を言い当てたことにはなるまい。自ら意識するよ否と云かわらず、彼らたちは確かに、いわゆる転向者
ではない。転向の性格も若干ふれたように決定して一様ではないが、雑誌『日本浪漫派』とそのグループを、彼ら
は皆必要とし、なれを実現しようとしたのであるか。

わたした便刊号の巻頭に、『文学といふものは色々と言へ色々と言へるけれども、局のところは、作家と読
者との共同体をつくるといふ極簡單な機能に則るやうだ。言葉を換へて言へ、作家をも読者をも教ぶものが
文学である。いうふうに始まる中島栄次郎の『浪漫化の機能』を彼らが掲げていることを、じつに興味ふかふか思の
ない作家の問題だとか中島はそのなかで語っているが、ドイツ・ロマン派の一、二の詩人に即して言えば、あなた
楽はといえないかわりに、独創的で新鮮なロマンティシズムの解釈あるいは理論として評価しうるものとも思え
ない。そうしたエッセイを、平俗低劣の文学が流行している。日常の微温の嘔吐は不急の信条を疎めさせたと。
僕ら兹に日本浪漫派を創るもの、一つに流行への挑戦であると、いう高踏的な『日本浪漫派』広告すなわち

57
マニュフェストを掲げて文学運動を開始した彼らが、雑誌の創刊号の巻頭に飾ったのは、おそらく、文学は作者をも
読者をも救うものでありたいという提言に、彼らはそのように卒直に大胆には表現し難nuts内部にかかっているお
のれの願望との一致をみたからである。それは、一九三二（昭和七年という歴史の屈折点において創刊した）
の創刊号の「編集後記」で保田が、「私たちは「何の為に」「なにを」書くかと、新しい角度から問ふ以前に、
つまり文学の効用をいふが、それ以前に「なぜ文学をする」、文学をしたした、とその生の意識を問うとすれば、
熱を感じる」といった意識と決して別次元のものではないので、文学的為が存在の覇り所にほかならなかった彼
らにとって、それは孤立や破滅への道であるよりは、救いへの希求にたながっていた。孤立や破滅をいとわないな
ら、彼らは絶滅の危機に瀕した革命運動に己れを賭け、初志を貫徹さればよかったはずなのだ。小林多喜二のような犠牲者あるいは殉教者がいるにいたっては、転向者
が続出した時代とは言え、背教あるいは転向者もまた、新たな孤立と破滅への道として、きびしく認識させるをえな
かっただろう。司はみな、僕からはなれ、かなしが眼を僕を読める。友よ、僕と語れ、僕を笑へ。ああ、友はむ
しく顔をそなむる」（同化の華に「日本浪漫派三号」と太宰治がかいていうような状況に、あるいは自意識にさいな
まされつつ生きねばならなかったのだ。救いのための文学が必要であった。
そうした彼らの「日本浪漫派」広告は、現在の文学のすべてを「平倉低貫」「文字を弄する能力の懸戦」など
の発展なものとしてのロマン主義的なものではない。と非難を浴びせられたのも、あから理由のないことで
日本語の文章です。内容は、具体的な文脈が不明なため詳細を説明するのは難しいです。よって、これ以上情報提供することができません。
実ではあったろう。しかし、右のエッセイを彼の「中間者」でしかないことにかわりはない。「転形期の文学」（昭和九年九月刊）以来の彼の苦闘は、おそらくそうした自我の救済の方策を、文学を通じて見出すことにあったのではある。神保光太郎の回想に於れば、「コギト」や「日本浪漫派」などのグループが続出したのは、きびしい社会的状況のなかで「詩を守り、自分を防衛するために、人間的な信頼、お互いに知り合った」者同士が固まってゆくほ
かなかったからだとのことであり、「日本浪漫派」の結成や勝井の参加の動機にも、そうした面がなくはなかったろうと察せられはする。しかし、たとえば保田と重郎がはたして亀井のよく理解者であったかどうかは、あえて論証は避けるがかなり疑わしいところがある。保田に対する亀井のそれとはあきらかに異なる。

「日本浪漫派」七号に保田が発表した「主題の積極性について（又は文学的暖昧さ）」は、すでに誰か指摘してい
たと記憶するが、亀井の「生けるテニ」ともに、初期のこの雑誌の代表的なエッセイである。しかし、保田はデ
カタンツをイロニーを強調するのだった。両者の対照的な点のひとつがそこにあろう。大体「日本浪漫派」の発足当初
から、保田の文学的潮流は、亀井のそれとはあきらかに異なる。

「僕らが青春を喪失したといふこととは、一つの歴史的な現象を云ふまでである。青春の喪失とはひい換へると
ユーモティの喪失であり、未来を既成のヒューマニティで類推でうぬ意味である。そのために僕は今日何の形での
デカタンツにかく興味をはかれない。」（中略）デカタンツの積極性に、すべての文学は依存していた。
『日本浪漫派』と『四季』（河野）

を紙に建設する荒蕪の行ひは何かのデカデンツであろう。そしてさらに「僕らの時代はイロニーの時代である、あらゆる偉大なるもの光栄のものが己の故郷としてのイロニーを考へざるを得ない日である。（中略）そうして僕らは正直のところ、わたしたちは今日の保田の文章は難解にすぎて、どこまで正確に理解していけるか心もないとないのだが、彼のいう「人工」は、亀井の「虚構」とはるも別ものだろう。亀井が時に時代の精神の状況を鋭く反映しており、そこに「日本浪漫派」の一般的の特性をみることもできるだろう。亀井が、「転向者としての自我の救济の道を必ずしも模索していたとき、保田は観念的操作の問題として、いちはやくそれをくぐり抜けており、観念の世界にいて自己を救济していたのではないかと思う。つまり、亀井が挫折感につながった思いに耐えながら、文学にかかわることによって知識人としての現実の自己を逃がうと足掻いていたのに対して、保田は文学的為され自体を活路となし得たのではないか。見方によれば、それは主義的なつよい、荒唐無稽ともいうべき文学的論理ではなかった。亀井にくらべて現実からじかに深手を負うような立場にはいかなかった保田は、その精神に屈折はあれ、社会的存立として身軽で自由だった。おそらくそのこととも関連があるであろう。存在としては軽々で自由だった。

いずれにしろ、一般にいう「日本浪漫派」とは、亀井の姿勢やその思想ではなく、保田のそれが象徴するところを解釈で薄しろるほど単純で明解なものではない。

「ブロッタリ文学雑誌のあとをうけて発足した雑誌『日本浪漫派』という系譜をさすと理解して、ほぼ誤りであるまい。しかしその呼び名が狭いすぎたと、広く漠然としたものであったりす

61
『日本浪漫派』と『四季』（河野）を比較して、その相違は結局「詩の発想の根源にアイロニーを有していたかいないかだ」と指摘したが、対照的だという部分をもっていた。この傾向は時代が下にしたがっていっそう顕著になる。昭和初期のモダニズムとプロレタリア文学のように、同時代にまったく性格や傾向を異にする文学運動がおこることとは、決して珍しいことではないのだろう。しかし、両者が重なりあってゆくケースはあまりない。Fade

向うという地盤から芽ばえた異母兄弟だ。と、平野謙に『現代日本文学辞典』（河出書房）で規定された「日本浪漫派」と「四季」は、明らかに異のものとしている。だからといって取扱うべきである。『日本浪漫派』の歴史は、「人民文庫」と後に『日本浪漫派』『広告』という高踏的なマネユストを発表し、創刊号には高文調の『創刊号』を掲げるなど、いわば啓拐物よりも重要な発足をし、雑誌の内容そのものよりはむしろマネユストで物議をかすという。堀は、『BURENIA』風の「四季」という名のカイ（Center）の巻面を作ったのである。つまり、評論、小説、詩を一種の帳面に書きつけてくるものにし、それを季刊月刊と組み合わせたのである。小川和佑は、「彼は、はめたり取扱うべきである。『日本浪漫派』の歴史は、「人民文庫」と後に『日本浪漫派』『広告』という高踏的なマネユストを発表し、創刊号には高文調の『創刊号』を掲げるなど、いわば啓拐物よりも重要な発足をし、雑誌の内容そのものよりはむしろマネユストで物議をかすという。堀は、『BURENIA』風の「四季」という名のカイ（Center）の巻面を作ったのである。つまり、評論、小説、詩を一種の帳面に書きつけてくるものにし、それを季刊月刊と組み合わせたのである。小川和佑は、「彼は、はめたり取扱うべきである。』と小川が指摘する。堀がモダニズムの流れにあったことは、そうした面からもある程度推測しそうだ。しかし、小川が指摘する。堀がモダニズムの流れにあったことは、そうした面からもある程度推測しそうだ。しかし、小川が指摘する。
が増えた作品だけをゆったリスペースをとって印刷したアンソロジーとで言えるべきこの冊子は、冊子それ自体がマニア・エストであると言えはまるだろう。それがほど昭和四〇年代の個性ないしは好みがつよく現われている。普遍の雑誌のサ

イズに、ページも薄くした共同編集の月刊『四季』も、基本的には季刊の方針が踏襲されており、一〇号まで

の編集者代表は堀である。ちなみに『四季』という誌名は季刊雑誌の意味を現わすものであったらしいが、月刊に

そのままわけがれたわけである。伝統的な抒情の復活などと結びつけて解釈してはならないわけだが、たとえ思

想性や政治性の介在の余地がないその誌名は、雑誌の内容に照して興味ふかくと思われる。

ともあれ、一切の外的要素から、彼らが好ましく思う文学の純粋さをそっと守ろうとする、いわば守勢の姿勢で

はじめられた『四季』は、あるいは当然ながら文学運動ではなかった。強いて言えば趣味的な要素の濃いものであ

った。その点でも『日本浪漫派』とはほどほど、彼らが初期にかかわりあった『詩と詩論』とも、その性格を

異にしていた。『詩と詩論』が、モダニズムあるいはエスプール・ヌーヴォーの運動体としての側面をかなりつよくも

っている事実は、おそらく否定するわけではない。後年、丸山薫は『モダニズム派の極端な感性否定の主張

は、あまりに方法論に偏し、却って詩を実感から遊離した方向を取ってゆきつつあった』と、『詩と詩論』の問題

にふれてから「由来、運動というものは、一を進めんとして十を張張し、一つの更新を成しとげようとして、従々

に九つの大切なものでも失うことがある」と語っている点に注意したい。もともと『詩と詩論』は、既成詩人と

プロレタリア系の詩人以外の新進詩人たちを網羅した混成集団であったし、春山行夫らの「詩を実感から遊離

しめる方向への極端な主知主義の主張についてゆけなかったのは、分裂して『詩・現実』をはじめた丸山や三好だ
『日本浪漫派』と『四季』（河野）
なるもあって、そうした堀の文学や、彼がつくった『四季』に、政治や社会など外的時代的現実の状況が

堀の作品については、彼の作品をきっかけとして人の周りの人間に対する同情心をもつこと

月刊『四季』創刊時点では、すでに、東大建築科に入

にかなり作品を発表し、いちおう詩人として認められるにいたっていた津村信夫はもっとも。

さりながら、その好意に物語っているように思う。そして『四季』は、丸山薰が追想して語っているように、

始その雰囲気の中心をなしていたのは津村と立原と、四季社社主であった両部君と。その若い三人を育て上げ

異分子のように思える局も、自分は局内相談をおこなっていたという。また、局の常連で、局内にあっては

君、しなばには近親の青年であった。津村信夫君、立原道造君、それから後の野村英夫君、いずれもみな堀のまち

の青年『四季』号の山岸外史『四季』七号（昭和二〇年五月号）に執筆を依頼されて、『この詩の冊子に載

野気や性格は、あるいは局を望んでいたのは、おそらく明らかであろう。ついでに傍証までにあげれば、『日

はれることになる。つね日頃不穏の顔を洗い直して締縄のよい啓発人方の前でも達なるような賞賛的観念に

なっても『日本俳絵派』の山岸には『四季』はそのように見えているということ、にもかかわらず、個人的にで
『日本浪漫派』と『四季』（河野）

あらしが両誌の交流はすでに始まっている事実は興味深い。

『四季』は一九三五（昭和二年二月号）から、それまでの主要な寄稿者同人として、その名簿を発表しているが、

堀、三好、丸山、津村、立原の五名に、井伏鱒二、荻原朔太郎、竹中郁、田中克己、辻野久寛、中原中也、桑原武夫、神西清、神保光太郎の九名が加わっており、一九九号からはさらに、室生犀星と竹村俊郎が加わり、以上の一六名が戦時下の『四季』の主たる担い手となるわけである。そして一六号から五一号（昭和二九年九月号）まで、神保と津村の二人が編集を担当し、ほぼ毎号二人の編集後記を添えるようになる。いきおい堀辰雄の接直的な影響は薄らぐわけだが、ともともとあまり表面にでる人ではなかったので、やや極端にいえば津村や立原を育てたそのことが、

『四季』の雰囲気への堀の影響にほかならなかった。

『立原道造の死によって、雑誌『四季』の性格が変わった』とのこと、

悼文でうぞめるという類例の扱いをされている。

『四季』の性格が変わったのは、追る多くの太平洋戦争の影響も含まれ、

立原が死んだのは一九三九年三月二十九日であった。

『四季』の全冊を通読した印象を大岡信は語っているが、事実そのとおりだった。

立原道造の死によって、雑誌『四季』の性格が変わった。

一九三九年三月二十九日という日付が、神保と津村の役割を表している。小川和佑は指摘しているが、神保と田中克己など、『ギリ』および『日本浪漫派』のメンバーが関わっているだけでなく、神保光太郎という詩人の存在を無視して、現在は勿論、以後も『四季』を語るのは不可能である。『立原道造の死によって、雑誌『四季』の性格が変わった』と、小川和佑は指摘しているが、おそらく両誌の同人の交流、ということはその面構成などの点でも、荻原朔太郎とともに神保が果した役割は、かなり大きかったであろうことは、十分察せら
ところである。彼自身は、『四季』への同人誘致をうけたときに、いろいろ考え人にも相談したが、『浪漫派』の名
において、著しくも矮小が意図するものと、『四季』が方向するものとは少しも矛盾するものではないと信じ
て快諾したと言え、要は『詩も散文を問わず、日本文学界に正しき詩的神髓を渋滞高揚せしめるもの』と信じ
と、『四季』一六号の『編集後記』で語っている。亀井勝一郎に誘われて『現実』から、創刊の時点では唯一の詩
人として『日本浪漫派』に参加した神保は、大学で独文を専攻するので亀井と共通の話題をもっていれたあるう
し、実際的な活動の体験はなかったが、プロレタリア運動のたんなる傍観者ではなかったらしい。しかし、『日本
浪漫派』創刊号の『六号雑記』に、これから浪漫主義の詩学を確立せねばならぬと記している神保は、素朴で熱烈
に、そう意図していたのであろうが、しかし彼の詩には、『かうしたリリックのない時代にさへも、尚彼等の魂を
歌ひ続けてねばならなかった』。そこで彼等の歌は悲しく傷つき、リズムは単純に破滅し、声はしぶれても低く、心は
虚無の疑惑に暗く悩みつついて居ると、菅原華太郎が伊東静雄の『わがひとに与ふる衰歌』を激賞して語ったよ
うな屈折や虚無や破滅の要素はなかった。むしろ健康で素朴で意志的なリリスティであった。

あそをを出る海。
乳臭い郷愁が胸をいっぱいでした。
ことばが嘆煙のよう立ちのぼってきた。
歌が口を突いた。
みんなすなわち合唱した。

『日本浪漫派』創刊号に発表した作品『童篇』である。亀井の痛みや保田のデカダンツよりは、むしろ『四季』の丸山や三好の詩情にぼらかに近い。初期の伊東静雄ならおそらく応じなかったであろう『四季』同人の勘詐に、神保がささやき応じたのは、その資質に照してみてもごく自然のことであり、そうでなければ、誘われることもなかっただろう。

そうした彼が『四季』にあって果たした役割のひとつは、やや極端にいえば、その士俗的あるいは土着的な生活者としての詩的感性で詩画を彩ることであった。彼の属していた『日本浪漫派』の同人たちは、中谷谷三重、保田が大和、亀井が北海道、そして神保が山形というふうに地方出身者が多く、その感性や詩意向がそれぞれある程度性格づけていたと言っている。ところが、『四季』の雰囲気の中心をなしていた堀や津村や立原は、関東大震災以後ことめやいように変色する。だがそのような風土を通じて愛した詩人たちであって、それと同一の詩を育むこともあつた。
小鳥よ肺結核よ

僕の骨にとまってる

おまへが喉で突つくから
僕の痰には血がまじる

「病」部分

なにに象徴されるのように、病気や生理すら水彩画のようにしてしまおうもので、土俗性や土着性の介在する余地のないものであった。そこには、さきに引用した文章で丸山が、モダニズム詩は「詩を実感から遊離」させることだという性格をうかがわせものがあるが、『四季』の場合そのゆきすぎはなく、ふたたび丸山のことばをかわれ、『詩を伝統の流れに割って反省することによって、それを行きすぎた方法論の無惨な餌食に』はさせなかったぼんの。モダニズムをくだっていなかった神保は、その資質と編集者としての職能において、『四季』のそうした側面を大きく担っていたとみることができよう。彼が立原道造の才能にいちはやく注目して、立原の第二作目の一四行詩『風に寄せて』を『コギ』（昭和6年九月号）に紹介したのを新古今和歌集などの抒情の伝統をふまえ、その心象風景を、肉感的なものを比較的稀薄にしてもとめることなく、水彩画のようににたたえあげる才能に着目してであろう。神保の抒情や関心と重なりあう部分をもつながり立原はまるで異なった世界の住人のような相貌で、
『日本浪漫派』と『四季』（河野）

1. 大岡信『昭和時代の抒情詩』（昭文社 新潮社）などに。「四季」では、まず、時代の状況下のものだったか、くどく説明する要もあるまい。前に、『四季』はまる一年間休刊していた。なぜかは詳らかでない。さらに付言すれば、当初橋・が興味していたものは、野村英夫や日増篤、小山正孝らの詩や歌文、リルケ文学などの訳載によって、廃刊までいおりう重われていることは注目に値する。

2. 小川和信著『四季』とその詩集『有精堂』八〇頁。
堀辰雄の直接的な影響のもとで育ち、もっとも『四季』的な詩人として立原道造の詩を死にみておくと思う、彼の場合はやや特異なケースだと言えなくはない。

しかし堀辰雄は生涯を通じてたった数篇の詩をのこしただけであるが、その小説をはぐしてみると詩がイラクラに光を
『日本浪漫派』と『四季』（河野）

田の詩人としての仕事を継いだのが立原道造だったと言ってもよろう。堀はまた、まだ旧制高校の学生で、ほん
の一、二篇の散文しか発表していなかったこの年少の友人が、己れの詩の資質や志向と相違するものをもっていること
をいち早く見てとった。『四季』号に立原は、その年の夏の信濃追分における生活に取材した散文詩である『村
くらし』を発表して、その詩的資質を先輩詩人たちに注目させ、堀の期待に応えたが、
『村くらし』は、若い日の堀の詩『天使達』や『綺はかが』のスタイルや技法を、まったく似通ったものであった。

郵便局は荒物店の軒にあった
手紙をかいて日毎の日傘をさして
別荘のお嬢さんが来ると彼は無精者らしく呟き
お嬢さんは急にかなしなくなり、ひそしきした街を帰って行く

* あの人は日が暮れると黄いろな帯をしめ
村外れの追分道で、村は落葉松の林に消え
あなたはそのまいまい黄いろなゆうすけの花となり
夏は過ぎ......

（村上長治）

内装的な若者らしい心の影響や、自己の生理とはかかわりのない擬人化や風景描写が堀のちがいを示している

が、堀の詩をあつめて、 benz書きの『堀辰雄詩集』をつくるほど熱愛していたその詩から、もろに影響をうけても

不思議である。しかも、堀の感化はそれだけにとどまらなかったようである。

第一高等学校のクラスメートだった杉浦良平は、高校生のころマルクス主義のなんたるかかも知らなかったが、

「小地主の家に生まれたことに罪悪感を抱いて」進歩的的な言辞を弄していたが、立原はそんな杉浦に「堀辰雄さん

が一高のころ、文学者が文学の問題を経済学や革命の問題にすりかえて論じるのは単法だ、と書いたのを読んだば

かりだ」と言って「カルカシル」と笑ったと語っている。

思想や文学の問題はもちろに、その軽井沢や道分の生

活にしても、立原は堀に学び、堀の生き方とその文学を追体験するかたちで成長して行ったと言いうのでな

いか。

そうした立原が独自の技法とスタイルを、あるいは声調を確立するには、生前刊行した二冊の詩集『設草に寄

す』（私荐代、昭和五年三月）、『暁と夕の詩』（四季社、同年二月）に各一〇篇ずつ収録されているような「一行

詩」を書きはじめつからとのことだが、わが国の詩語としての口語は、この詩人の出現によってその音楽性があらため

て見直され、堀りおこされたので。堀辰雄の周辺にいて、立原よりいくつか若年だった中村真一郎や加藤周らが

おこえた戦後直後のマチネ・ボエティックの詩運動は、立原の一一行詩をおそらく創発発展させようとするもの

であったが、実作において立原を超える成果を収めた詩人は、どうだろうかかったようである。
『日本浪漫派』と『四季』（河野）

夢はいつも　かっって　行った　山の麓のさびしい村

草ひばりのうたひやまな
水引草に風が立ち

うららかに　青い空に　は　陽が　借り　火山　眠っている　た

そして　私は　見る　ものを　鳥々を　波を　岬を　日光　月光を

夢は　そのささやは　もう　か　ない

なにもかも　忘れ果てよう　と　あまり

忘れない　ことは　忘れてしまった　ときは　は

星々に　てらされた　道を　過ぎ　去る　であろう

（のちのおもに）
内多めも夢の思い出にふけりがちな少年の夢想は、ことばによる音楽的なびびきと流動性のもとにとらえられ、われわれの心の細いもとを薄く弱い部分から遥々までしのびこんでくるような効果をもっている。彼が右にあげた二冊の詩集を楽譜にそっくりの型に装飾し、内容をSONATINE No.1, No.2というふうに分けたряд全体が、ひとつ物語として展開されるように、作品を選び配列していることなどにも、彼の音楽へのなみなみならぬ関心がうかがえる。そうした彼の方法なり関心は、彼が作品の背後にある経験や生活環境の実在性をあたえかがり消去していることとも関連するが、可能なかぎりその形や性格を損ねずに夢想に表現をあたえているには、きわめて効果的な方法であったと言えよう。

ところで、右の作品にも三度くりかえされている立原の「夢」だが、それはまどかなみちたりしたイメージを結ぶのではなく、多くの場合に、むしろ完全に騙され、しかも失意や破滅の予感にうつかるようながら彷徨し、はみだそうとする性格のものとしてうかわれていることに、その特徴があるように思う。それは、立原の生の観察とその詩の特徴的な性格であるとも言えるであろう。

「これは『詩』である。しかし決して『対話』ではない、また『魂の告白』ではない。このような完璧な芸術品が出来上るところで、僕はつきりと中原中也に別離する。詩とは僕にとって、すべての『なぜ？』と『どこか』との問いに、僕らの『いかに？』と『どこへ？』との間を問う場所であるゆえ、僕らの言葉がその深い根源で『対話』なる唯一の場所であるゆえ」と、中原の詩『汚れまった悲しみに……』を引用して立原は言っているが、それはいみじく、失意や破滅の予感にうつるかが彷徨し逸脱しようとしつつ、一四行の定型によって危険に均等をえてその甘美ではかなげな夢想が、じつは彼の存在そのものを根拠的なところからしご動か
八、四世（昭和三年六月二十五日）に連載した「風立ちぬ」論がその理論的結実であり、三七号には、さきに引用した中原中也論「別離」も掲載されている。

「風立ちぬ」は、おそらく出自の細菌学論だが、立原は生身をもってその影響を浴びてきた細菌の文学について、自分の病気のようなら自身において一枚の風景画にしてしまう作者は何、作品のなかでは完全には在であり、しかもその作

品は、ひとつの顛末のなかで完結してしまい、問いと対話は停止してしまう、それは単なる破壊であり、一層あらはれな悲哀である。否定的地

盤である別離は否定でなくてはならない。中略）僕らは今じめて新しく一歩を踏み出す。『風立ちぬ』とし

るしたひとつの道を脱け出し。どこへ？しかしながら、光にみた美しい午前に。}

訳別は、もちろん娜へんの甘えと依存の態度を一しめて抵抗して行くものではなく、ただこそそうした身振りやこと

ばも可能であったにちがいないが、その理論的構成の方法や用語は、保田や芳賀の影響をそのままあらわして居るこ

とでは、誰の目もおそらく明らかであろう。立原の不幸は、保田や芳賀がもっぱら観念の世界において追求し形成

しようとした問題を、みずからの肉体と行為において実現しようとする衝動にとらわれる、その衝動にしたがっ

て現しそうとしたことに対するあった。つまり、「決定」という「別離」という「対話」という、それをたんなる観念

の世界でいなすのではなく、行為による表現として具現した、あるいは具現させるようとしたのである。

「風立ちぬ」と書いた一九三八（昭和三年）、つきり死の前の初冬、すでに肺結核によって胸を冒された休養

を要する体で、彼は未知の東北地方を訪れ、しばらく山形に滞在した、帰京して痔瘍の手術をうけるが、ようやく
『日本漫遊派』と『四季』（河野）

これが懸けるように、熱にうかされたように京都から山陰までで長崎へおもむくのだ。東北で北欧のメルヘン
を生きた彼は、南国の古い町長崎の、エキゾチックに、南国の夢を生きようとしたのか。その年の三月に東大を卒
業して、建築事務所へ勤めていた現実の生活環境からの離脱と間いの衝動に、身をまかせたことにかわりはない。

旅先での出来事や想念を、毎日記したノートしながらの旅であった。長崎の町で古い異人館を見つけて暮すことが
目的の一つだったのである。しかし、そのような手頃な異人館が簡単にえられるはずはない、また町そのものに、
当然ながら彼の夢想に対応するようなものはなにひとつなく、問いかけて、なんらかの応えをもともとねず、対話
は、印象や想念をノート・ブックに録すだけのモノローグにとどまった。しかも彼は、長崎に着く頃に大量に

咳血し、くりかえされる咳血と発熱のために、勤務先の友人に紹介されていた病院のベッドに伏せたとき、絶対安
静を医師に命じられる状態に陥るのだ。「新生と呼ばでいい時期が訪れました。革新というものを、大陸の規模で

かんがへ得る僕たちの世紀をいまは肯定します」と、東北の故郷から友人への手紙にかいた立原は、やっと小康を

えた長崎の病院のベッドの上で、自己の資質についてノートに次のように記している。

「かへってひとつの家をつくって、そのままであるのに庭をつくり、それの内に家具をおき、つまずくかな愛情
で、生活をきづくことにあるのだ。その時、宇宙的なささつなさびや大なる遺徳よりも、宇宙を自分のうちにきづくこ
と。せまい周囲に光を注ぐこと。それが僕の本道だとおもふ。きづき破れ流れる浪漫家の血統にはつひに自分
は属さないともおもふ。」

その翌日のノートにはさらに、「ソギリたちのあまりにためたく、愛情のグランニのない文学家の観念を否定す
ること」。そして、ノーヴェリスの青い花より、むしろゲームのマイスターに、犀星の詩「愛あるところに」自分
『日本浪曼派』と『四季』（河野）

早く死ななければ

「四季」四七号「立原道造追悼号」の巻頭に掲げられている三好直治氏の追悼詩である。その若さと、いう、し
さ清純さにおいて、もっとも「四季」的な詩人であった立原の死は、あの若さで世を去ったにもかかわらず、妙に
痛ましさや暗いむごたらしさの感を、さほどよくはもとまわわない。あたかも約余年まえの死だからではない。

そういう点で、そんなに違いない以前のこととは思えないのである。いつでもあっと吹き消せるほの暖かい透明な炎
のような詩は、つねに死と消滅の予感にうかがっていった、そのせいかであろうか。あの時代の状況下にあって、
ひとりの詩人が自分の詩の世界の純粋さを守りぬくには、「早く死」ぬほかなかったかも知れない。「早く死」

言わねばならぬだろうか。もし生きながらえていたらどう変容したかはわからないが、彼が、かなり早くから
「日本浪曼派」に感染していたことも、時代的政治的状況による影響を被りつつあったことも、まぎれのない事実
ではある。だが、むろんそれは立原道造ひとりだけでなくて、有名無名の幾多の詩人や作家そして青年たちが、も
っと無数なたれで影響を被り、時代の状況にまきこまれて行ったのだ。問題としてはその方が、はるかに重大で
あることは言うまでもない。

（1）立原道造については、わたしは以前に「優し語歌」立原道造論」「火煤「三」「六号」で詳しく論じた。